



上向台小だより

3月号

西東京市立上向台小学校

令和7年3月3日

<http://www.nishitokyo.ed.jp/e-kamimukoudai>

上小 リビルドへの挑戦！

～令和6年度を振り返って～

校長 酒見 裕子

令和6年度も残すところ1か月となりました。先日は、御多用にも関わらず、授業公開及び保護者会に、多くの皆様に御出席いただきまして、ありがとうございました。子どもたちの一年間の成長を感じた方が数多くいらっしゃるのではないかと思います。私もその一人です。この1年間、子どもたち一人一人が頑張ってきた姿をお見せすることができ、嬉しく思っております。次年度は土曜日の公開を増やす予定です。平日にはなかなかいられない保護者の方々にも、少しでも御参加いただける機会となるようにしたいと考えております。御協力のほど、よろしくお願いいたします。

さて、今期「御上先生」というドラマを視聴しているのですが、私にとってハッとさせられる台詞がいくつも出てきます。

そのうちの一つは、「今、教育に必要なのは、バージョンアップではなく、リビルド。既存のシステムやプロセスを根本的に見直し、再構築することです」という台詞です。この台詞を聞きながら、今年度の本校におけるリビルドについて、思いを巡らせました。

まず、本校でリビルドしたこととして一番に挙げられることは「授業デザイン」です。今年度は「デジタルを活用したこれからの学び研究校」として、自ら学び方を選択し、自立した学習者になることを目指した授業デザインに挑戦してまいりました。いかにうまく知識を伝達するか、いかに巧みに講義するかといった指導観を転換し、「学びたい」という子どもの意欲をどのように喚起するのかなど、子ども一人一人を主語にした学びについて実践を深めてまいりました。このような実践を通し、子どもたち一人一人が主体的に生き生きと学ぶ姿が多く見られるようになりました。

また、「校内別室指導支援員配置事業」で校内に別室を開室したことも、今年度のリビルドの一つです。全国的に不登校の子どもたちは年々増加し、過去最多となる人数となっています。これまでと同じ仕組みでは救えない子どもたちが多くいます。一人一人の子どもを主語にする学校を目指すためにも、誰もが自分に合った学び方を選べるよう、一つの選択肢として、校内別室を開室しました。「教室にいないと学ぶことができない」ということからの脱却、いつでも別室に支援員がいることの安心感など、年間で18名の子どもたちが居場所として活用することができました。

さらに「小学校教科担任制等推進校」で高学年の教科担任制を始めたことも、今年度のリビルドの一つです。

今年度は高学年において、一つの学級を一人の教師が全てを対応する「学級担任」のスタイルから、複数の教師で子どもを見守る「教科担任」を導入しました。教科指導の専門性の高い教師によるきめ細やかな指導を行うことで、授業の質が向上しました。また、子どもにとっては複数の教師と関わる機会が増えるため、相談などがしやすくなったようです。

それからハッとさせられた台詞がもう一つ。主人公の先生が何度も生徒に投げ掛ける「考えて」という言葉です。

物事を感情で判断する前に、まずは正しく知ること。そのために情報収集したり、整理・分析してまとめたり、様々な意見を聞き、議論をしたり……。このようなことは、本校でも今年度「学びのプロセス」（参考：学校便り12月号）として、意識して指導してきたことでもあります。

これまでの学校では、教師は子どもたちが失敗しないように与え過ぎていて、子どもたちから「考える」チャンスを奪ってしまうこともあったように思います。学校も社会も自分たちのものであり、自分たちで「考えて」変えていける、そんな風に考えて行動できる上小の子どもたちになってほしいと思います。

加えて、「考える」ことが必要なのは子どもだけではありません。私たち教師も、そして社会も、「当たり前」と思っていることを考え直してみることも必要だなど、このドラマを見て強く感じました。

子どもたちは元々素晴らしい力をもっています。これまで私たち教師や大人がよかれと思ってしていたことが、子どもの主体性や自立を奪っていたことがあるかもしれません。子どもたちは大人が思っている以上に自分の力でできるものです。

人生100年時代！次年度も、子どもたちが生涯学び続けることができる「自立した学習者」を育成できるよう、教育活動を推進してまいります。

少し早いですが、今年度の本校の教育活動に際しまして、いつも温かく御理解・御協力いただきました保護者の皆様、地域の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。